連載Ⅱ
ホスピタリティーの
手触り 75

新たなる「金」としての観光

旅行作家
山口 由美

観光は人々の誇りと直結

私が南アフリカを初めて訪れたのは、一九九二年、アパルトヘイト政策撤廃で日本政府による制裁が解除になった年のことである。アフリカ最大のトラベルマート、インダバ（ＩＮＤＡＢＡ）の取材だった。インダバとは、ズールー語で長老たちが集まる「会議」を意味する。

それから十年ほど後、再び訪れた南アフリカで、私は、シンギタというサファリロッジと出会い、それをきっかけに、周辺国を含む南部アフリカに足繁く通うようになった。大自然の真ん中にある最上級のラグジュアリーは、雷に打たれたような衝撃だった。アジアンリゾートが束になってかかってもかなわないと思った。私のその予感は正しくて、シンギタは、二〇〇四年、『トラベル＆レジャー』『コンデナスト・トラベラー(Condé Nast Traveler)』というアメリカの旅行雑誌の読者ランキングで、相次いで「世界一のホテル」の称号を得たのである。そうして有名になる以前、シンギタを取材する機会があったのも、最初の南アフリカ体験があったことと無縁ではないだろう。

Singita Ebony & Boulders
写真提供：ルレ・エ・シャトー　www.relaischateaux.com

そのきっかけを作ってくれたインダバに、二十一年の時を経て、再び訪れることができるとは思わなかった。インド洋を望む商業都市ダーバンの国際会議場で行われた開会式で、私は感慨深い思いに浸っていた。二十年あまりの年月は、この国が歩んだ自由と民主化への道のりそのものであり、さらにそれは観光業の発展ともリンクする。

南アフリカの観光業は、二〇一〇年のＦＩＦＡワールドカップの成功を契機に躍進したが、今もなお、国の主要産業は、一位が鉱業であり、二位が製造業だ。観光業は四位という位置づけである。それにもかかわらず、ズマ大統領自ら観光業に熱心なのは、観光という産業には社会的な側面があり、直接的に人々と関わるものだからだという。

インダバの会場で、トコジレ・カーサ観光副大臣にインタビューする

南アフリカの観光を熱く語る
トコジレ・カーサ観光副大臣

機会があった。柔らかな物腰の彼女は、観光業の意味づけを次のように語ってくれた。

「南アフリカの人々が自国の魅力や自分たちの持っているものに価値を見いだし、観光業が人々の雇用を創出し、経済に貢献していることに気づいた時、彼らはこの国の一部であることに誇りが持てると思うのです」

金とダイヤモンドで知られる国の、新たなる「金」が観光だというのだ。

南アフリカと同じく地下資源が豊富で鉱業を主産業とする国、パプアニューギニアは、大統領自ら観光を後押しする南アフリカよりずっと観光業が占める位置づけは低いが、そうした国でさえ、観光は、人々の誇りと直結していることを、私は現場で何度となく実感したことがある。

外国人観光客なんて数えるほどしか訪れない辺境の村で、極楽鳥を見せるからと、私は村長の弟に誘われた。野鳥の観測は早朝か夕方がいいのだが、その森の極楽鳥は、真昼でさえ姿を見せると彼は言う。村長の弟の、手が壊れるかと思うほどに強く私の手を握りしめた、湿った手の感触。村の自慢の極楽鳥を遠来の客に何としても見せたいという思いと、そのことが将来の現金収入につながるに違いないという思い。観光副大臣の言葉を聞きながら、私はその時のことを思い出していた。

来年で南アフリカは、マンデラ政権の樹立からちょうど二十年になる。アパルトヘイトからの脱却という人類史上まれな闇から光への歴史を歩んできた南アフリカだが、拡大する経済格差など、その道のりは平坦ではなかった。アフリカ最大の経済大国として成長を続けながらも雇用の創出が十分ではなく、結果として、治安の問題があった。ワールドカップの時も、それゆえに開催を疑問視する見方が少なくなかった。「しかし」と観光副大臣は言った。「私たちは我が国の治安維持対策を成し遂げ、我が国の治安に対する世界の見方を変えたのです」と。

南アフリカの人々は、その時、自国を訪れる人々に喜んでもらい、この国の魅力に気づいてもらうことの誇りと将来的な経済効果に気づいたのだろう。地下資源の「金」は掘り尽くせばなくなってしまうが、人々のホスピタリティーに支えられた「金」は、人の知恵次第で、未来永劫、価値を持ち続ける。

日本人観光客に何を見てもらいたいかとの質問に観光副大臣は「伝統と文化と、そして豊かな歴史です」と言った。

「ヘリテージ&カルチャー（伝統と文化）」は、そのまま今年のインダバのテーマだった。会場には、そのテーマに沿ったパビリオンがあり、副大臣の言葉通りの「豊かな歴史」があった。

会場でいくつかの出会いがあった。その一人が、かつてネルソン・マンデラ元大統領ら多くの反アパルトヘイト活動家が暮らした、ヨハネスブルクのタウンシップ（旧黒人居住区）、ソウェトにあるホテルの総支配人だった。ソウェトなどのタウンシップを訪れるツアーは、近年、欧米人を中心に人気があるが、スタイリッシュなホテルまであるとは思わなかった。私は、ラグジュアリーなサファリロッジだけでない、まだ見ぬ南アフリカの「金（ゴールド）」をそこに見つけた気がしていた。

（やまぐち　ゆみ）

インダバの「ヘリテージ&カルチャー」パビリオン